

「日本人の国民性調査」の二次分析の試み*

——宗教意識に関する質問諸項目のデータ分析——

真 鍋 一 史**

I. はじめに

本稿は、大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 統計数理研究所の知的財産の1つである「日本人の国民性調査」の「二次分析 (secondary analysis)」をとおして、日本人の宗教意識の諸相・構造・性格を探る方法論的な試みである。「二次分析」のためには、「一次分析」とは異なる新たな「視座」が必要となる。筆者は、そのような「視座」を、以下の論文において、「理論的考察」と「方法論的検討」という形で提示した。

真鍋一史『「日本人の国民性調査」の二次分析の試み——宗教意識に関する質問諸項目をめぐる理論的考察と方法論的検討——』『青山スタンダード論集』(青山学院大学) 第14号、2018年。

では、以上のような「理論的考察」と「方法論的検討」がどのようなものであったかという点、それらは、ごく簡潔に、つぎのようにまとめられる。

まず、前者の「理論的考察」においては、筆者は、「日本人の国民性調査」で用いられた「宗教」に関する4つの質問項目を、人びとの「宗教意識 (religious consciousness)」——広く宗教ということに関する人びとの「見方・考え方・感じ方」——の質問項目としてひとくくりにするのと同時に、そのような「宗教意識」という用語 (概念)

を、欧米の宗教社会学の用語 (概念) である「宗教性 (religiosity)」と対照させながら明らかにするところから始めた。そして、その上で、それら4つの質問項目の理論的な背景についても、同じように欧米の宗教社会学の諸概念と対照させながら考察した。

つぎに、後者の「方法論的検討」においては、これら4つの質問項目の選択肢の「形式」について検討した。その結果、これら4項目は、いずれも人びとの意識の「方向」——つまり、ポジティブあるいはネガティブといった「方向」——についての項目といえるものの、その選択肢の「形式」については、それらが「ポジティブとネガティブの相対する方向を示した形」と、「真ん中に0ポイントを置き、その両側にポジティブとネガティブの方向を配した形」の2つのタイプがあることがわかった。こうして、これら4つの質問項目間の関係性の分析において、このような選択肢の「形式」の違いが影響するかどうかの検討という問題を提起した。

本稿では、以上のような「理論的考察」と「方法論的検討」を踏まえて、データ分析を進めていく。そこで、そのようなデータ分析は、具体的にどのように進めていくかが、つぎの課題となる。データ分析をどのように進めていくべきかについては、こうしなければならないという一定の雛形のようなものがあるわけではない。したがって、ここでの筆者による「データ分析」の試みは、文字どおり「試み」であって、多くの先行研究から学んだものを取り入れながらも、しかし同時に、やはり、筆者の独自のものとしかいいよいのない

*キーワード：日本人の国民性調査、二次分析、宗教意識の諸相・構造・性格、度数分布、信頼性、妥当性

**関西学院大学名誉教授、青山学院大学地球社会共生学部教授

ものである。こうして、今回のデータ分析は、必ずしも定型的な形で進められるものではない。それでも、そこに何か一貫した「方針」のようなものがあるとすれば、それも、筆者独自の意味での「探索的データ分析」といったものとなるはずである。

では、筆者独自の意味での「探索的データ分析」が、どのようなものかという点、筆者はそれを「データ分析の結果（知見）からの豊かな仮説の読み取り（解釈）を可能にするもの」と位置づけるとともに、以下のように説明している（真鍋, 2014）。

科学と呼ばれる人間の知的営為の目標を、新しい命題の発見・定立・蓄積というところに置かざり、そこに向かって何が最も重要なことになってくるかといえ、それはどのようにして豊かな仮説を構築していくかの探索ということであり、そのような探索を可能ならしめるものが「探索的データ分析」にほかならない。（p.45）

こうして、筆者は、本稿におけるデータ分析の基本的な「方針」ともいえるべきものとして、「探索的データ分析」の立場をとるのである。

II. 宗教意識に関する質問諸項目のデータ分析

1. 日本における宗教意識の諸相

ここでは、「日本人の国民性調査」から「宗教意識」に関する質問諸項目を抽出し、それらに対する回答結果を用いて、データ分析を行なう。では、そのような筆者の「データ分析」は、どこからスタートするのであろうか。

筆者は、これまで、質問紙調査のデータ分析を、比喩的に、「森を見る分析」と「木を見る分析」に区別してきた（真鍋, 2014）。前者が質問諸項目に対する全体的な回答のパターンに焦点を合わせる分析であるのに対して、後者は個別の質問項目に焦点を合わせる分析である。そして、ここでの重要なポイントは、データ分析というものは、いきなり「木を見る」のではなく、まずは

「森を見る」ところから始めるのが望ましいというところにある。筆者は、これまで、さまざまな質問紙調査のデータ分析において、このような考え方を採用することによって、その有用性を確認してきた。したがって、ここでのデータ分析も、「森を見る」ところから始めたい。

しかし、具体的にいうならば、このような「森を見る分析」も、その「森」の見方——どのようなどころを「森」とするか——によって、さまざまな分析のタイプ——いわゆる「記述分析」のタイプ（真鍋, 2017 a）をとるか、それとも「構造分析」のタイプ（真鍋, 2008, 2009, 2017 b）をとるかなど——がありうることになる。ここでは、「日本人の国民性」という問題関心——Inkeles、吉野 訳（1997=2003）によれば、それは modal personality という観点から「集合的」に捉えられることになる——から、まず、「記述分析」を試みる。

(1) 「単純集計表」からの回答結果の読み取り

i) 宗教意識に関する4つの質問項目のそれぞれについての「その他・わからない」という回答の%の大きさの検討

宗教意識に関する4つの質問項目についての「単純集計」の結果を表1に示した。

この表1からすれば、「その他・わからない」という回答は、問11「先祖を尊ぶか」で1.5%、問12(a)「信仰・信心を持っているか」で0%、問12(b)「『宗教的な心』は大切か」で13.2%、問13「『あの世』を信じるか」で7.0%となっている。

ここで、筆者の、質問紙調査における「その他」および「わからない」という回答の選択肢についての、基本的な考え方もいべきものについて述べておかなければならない。

まず、前者の「その他」については、それは、質問の回答形式をめぐる議論から始めなければならない。例えば、社会測定の研究領域における先駆者の一人である L. Guttman は、それを、“range question”と“cafeteria question”に区別する。“range question”は、人間行動——質問紙調査への回答という形で捉えられる人間行動——の1つの側面に焦点を合わせて、ネガティブからポ

表1 宗教意識の質問諸項目の単純集計結果

問 11 先祖を尊ぶか：リコード後		度数	%	有効%
有効	尊ばない方 (1点)	180	11.3%	11.5%
	普通 (2点)	356	22.4%	22.7%
	尊ぶ方 (3点)	1032	64.8%	65.8%
	合計	1568	98.5%	100.0%
欠損値	その他	6	0.4%	
	D.K.	17	1.1%	
	合計	23	1.5%	
合計		1591	100.0%	

問 12 a 信仰・信心を持っているか：リコード後		度数	%	有効%
有効	持っていない・ 信じていない (1点)	1151	72.3%	72.3%
	持っている・ 信じている (2点)	440	27.7%	27.7%
合計		1591	100.0%	100.0%

問 12 b 「宗教的な心」は大切か：リコード後		度数	%	有効%
有効	大切でない (1点)	328	20.6%	23.8%
	大切 (2点)	1053	66.2%	76.2%
	合計	1381	86.8%	100.0%
欠損値	その他	47	3.0%	
	D.K.	163	10.2%	
	合計	210	13.2%	
合計		1591	100.0%	

問 13 「あの世」を信じるか：リコード後		度数	%	有効%
有効	信じない (1点)	530	33.3%	35.8%
	どちらとも (2点)	310	19.5%	21.0%
	信じる (3点)	639	40.2%	43.2%
	合計	1479	93.0%	100.0%
欠損値	その他	10	0.6%	
	D.K.	102	6.4%	
	合計	112	7.0%	
合計		1591	100.0%	

ジティヴへの rank order の面から回答する形式の質問文であり、「日本人の国民性調査」における宗教意識についての4つの質問項目ではすべてこの形式がとられている。では、“cafeteria question”とはどのようなものかということ、それについては、つぎのような例があげられる。例えば、「あなたは、普段、休日はどうのように過ごしていますか」と尋ねて、「身体を休めている」「家族と

時間を過ごしている」「趣味を楽しんでいる」などのそれぞれ次元の異なる選択肢をあげる質問文が、それである。

このような、「質問文の形式」についての Guttman の分類法に立つならば、「その他」という選択肢は、“cafeteria question”においては適合的なものであるにしても、“range question”においては必要のないものではなかろうかという疑問がでてくる。

因みに、「その他」を選んだ回答者は、問 12 (b)「『宗教的な心』は大切か」の場合の3%を除いて、問 11「先祖を尊ぶか」で0.4%、問 13「『あの世』を信じるか」で0.6%となっており——因みに、問 12 (a)「信仰・信心を持っているか」の質問については、質問紙に「その他」という選択肢が準備されていない。この点は、質問紙の作成者が、「信仰の有無」については「その他」という回答はありえないと判断したことによるものと考えられる。しかし、そうだとするならば、その判断に関しても、やはり疑問が残る——、その数値はきわめて小さい。ただ、問 12 (b)「『宗教的な心』は大切か」の場合の3%という数値については、それは実数で47名であるので、その具体的な「記入内容」の検討は、興味深い課題となる。ここでは、その多くが、「宗教的な心」という耳慣れない用語の意味内容についての疑問によるものではなかろうかという筆者の仮説を記すにとどめる。

つぎに、「わからない」という回答については、より重要な問題が提起されることになる。筆者は、これまでさまざまな質問紙調査のデータ分析に取り組んできたが、このような経験をおして、質問紙調査における「わからない」という回答には、いくつかの異なる意味の側面(次元)が含まれていることに気づかされてきた。このような点について、ここでは、以下の3点をあげておきたい。

①質問紙調査の結果の「解釈」においては、「わからない」という回答が、そこで「言及 (refer)」されている事柄についての「知識・情報・理解力の不足」を意味するものとして扱われてき

た。しかし、宗教という「超越世界」——「経験世界」に対して——についてのテーマが取りあげられる場合、そのような扱い方からは、事柄の重要な側面が抜け落ちてしまう。例えば、言葉の本来の意味での「不可知論」を、「われわれが認識できるのは、経験しうる範囲の対象であるから、神のような超経験的な対象について、われわれは何も知りえない」（須田，1989）という考え方として理解しておくならば、そのような「不可知論」の立場に立つかぎり、「宗教」についての質問項目については、多くの場合、「わからない」という回答こそが、「知識・情報・理解力の不足」とは全く逆の、「深い思索」の結果ということにはならないであろうか。

じつは、このような、ある意味で「啓蒙主義」的ともいえる考え方は、宗教意識調査の「神」についての質問項目の選択肢のカテゴリの1つとしても用いられている。それは、「国際社会調査プログラム（International Social Survey Programme：ISSP）の2008年の宗教モジュール調査の以下のような質問文と回答の選択肢である（真鍋，2011；2012）。

〈質問文〉

「あなたは、神について、日ごろどのようにお考えですか。」

〈回答の選択肢の1つ〉

「神が存在するかどうかわからないし、存在するかどうかを明らかにする方法もないと思う。」

②しかし、このような「宗教」というテーマを越えて、より一般的に、人びとの日常生活においても、人はある事柄について知れば知るほど、その事柄について単純に判断することができなくなるということがある。ある事柄についての知識や情報が少ない場合は、人は意外に容易に判断する。ところが、知識や情報の量が多くなるにつれて、事柄にはさまざまな側面があることがわかってくる。そして、その結果として、人は判断を保留せざるをえないという事態となる。このことから、質問紙調査における「わからない」という回答においては、質問の事柄そのものが知識・情報・理解力の不足のために「わからない」と答える

という次元と、知識・情報・理解力があるために、かえって「わからない」と答えざるをえないという次元の、少なくとも2つの次元がありうるということが示唆されるのである。

③質問紙調査における「わからない」という選択肢のカテゴリは、「そのような事柄には全く考えもおよばない」という意味の次元と、「賛一否、是一非、好一嫌などの二項選択において、どちらとも判断できない」という意味の次元の、2つの次元を含んでいるかもしれない。そして、そうだとするならば、「わからない」という回答が、後者の次元である場合は、それは、従来の“off scale”という性格づけではなく、むしろ1つのscaleの“middle point”——日本語でいうならば、「どちらともいえない」——として扱われるべきものということになる（Jagodzinskiと真鍋，2013 a）。

では、以上のような視座からするならば、「日本人の国民性調査」における宗教意識に関する4つの質問項目における「わからない」という回答結果については、どのような考察が展開できるであろうか。

ここでの回答結果からするならば、「わからない」は、問11「先祖を尊ぶか」ではわずかに1.1%、そして問12(a)「信仰・信心を持っているか」では、そもそもそのような選択肢が設けられていないので、これらの結果については、何らかの考察を試みるということが不可能である。しかし、あえていうならば、問11「先祖を尊ぶか」で「わからない」の回答の%が小さいという結果には、この質問の内容が日本人にとって馴染みの深いものであり、回答のために深く考える必要がないということがかかっているのかもしれない。

これら2項目とは対照的に、問12(b)「『宗教的な心』は大切か」と、問13「『あの世』を信じるか」では、それぞれ10.2%と6.4%が「わからない」と回答している。ここで前者については、「宗教的な心」という用語が耳慣れないものであるということとともに、上述の「視座」の③の“middle point”としての「わからない」というこ

とがかかわっているのではなからうか。

この“middle point”としての「わからない」ということについて、もう少し説明しておくならば、問 12 (b) では「『宗教的な心』というものを、大切だと思いますか」と質問して、その回答の選択肢は、

1. 大切
2. 大切でない
3. その他
4. わからない

となっている。つまり、回答者は、基本的に「大切」と「大切でない」の2つの選択肢のいずれかを選ぶ、いわゆる「二項選択型質問」の形式がとられている。そこで、このいずれかに決めかねている回答者が、これら両極の“middle point”として「わからない」という選択肢を選ぶということは、十分にありうることと考えられる。

つぎに、後者の問 13「『あの世』を信じるか」の場合の「わからない」の6.4% (102名) については、そのようなことは深く考えたことがないということとともに、上述の「視座」の①の「あの世が存在するかどうかを明らかにする方法がないので、あの世が存在するかどうかはわからない」といった、いわば啓蒙主義的ともいべき考え方がかかわっていると考えられる。

以上における「わからない」という回答結果についての筆者の「解釈」は、いうまでもなく「仮説」の域をでるものではない。しかし、このような「仮説」を準備することで、初めてそのような「仮説」のテスト——「検証 (verification)」あるいは「確認 (confirmation)」——をめざすデータ分析のスタートが可能となるのである。ただ、本稿では、そのようなデータ分析については、今後の方向を示唆するにとどめる。

ii) 「その他・わからない」以外の回答の傾向

以上においては、「単純集計表」にもとづいて、とくに「その他・わからない」という回答結果に焦点を当てて、その「解釈」を試みた。いうまでもなく、そうすることによって、1つの側面からする日本人の宗教意識の探索が可能になると考えたからにはほかならない。しかし、そのような試み

は、日本人の宗教意識の探索という substantive な意味を持つだけにとどまらない。じつは、それは、そのような「その他・わからない」という回答の% (の大きさ) によって、それぞれの「単純集計表」からの結果の読み取りに問題がでてこないかどうかをチェックするという methodological な意味をも持っているのである。例えば、「その他・わからない」という回答がとりわけ大きな% の値を示すという場合は、それによって、回答の「度数分布」の形に大きな影響がでてくることになる。しかし、ここでは、問 12 (b)「『宗教的な心』は大切か」で、「その他・わからない」が13.2% という10% を越える数値を示したものの、それも、それによって、「度数分布」の読み取りに問題が生じるというほどのものではないことがわかる。

以上のような検討を踏まえて、つぎに、4つの質問項目ごとに、「その他・わからない」を除いた場合の「度数分布」の形を見ていくことにする。その結果、問 11「先祖を尊ぶか」では、「尊ばない」(12%) → 「普通」(23%) → 「尊ぶ」(66%)、問 12 (a)「信仰・信心を持っているか」では、「持っている」(28%) → 「持っていない」(72%)、問 12 (b)「『宗教的な心』は大切か」では、「大切でない」(24%) → 「大切」(76%) というように、回答の% が1つの方向に向かって大きくなっているものの、問 13「『あの世』を信じるか」では、「信じない」(36%) ← 「どちらともきめかねる」(21%) → 「信じる」(43%) というように、回答の% が真ん中で低く、両極で高いという形——「バイ・モーダルな分布 (bimodal distribution)」の形——になっていることがわかる。そして、このような「バイ・モーダルな分布」を示す質問項目については、ほかの項目との「関係性」の分析において、問題がないかどうかの検討が必要となるのである。

(2) 日本における宗教意識の諸相

本稿では、「日本人の国民性調査」の宗教意識に関する4つの質問項目を用いたデータ分析を、比喩的に、「森を見る分析から始める」と述べた。以上の「単純集計」の結果の検討は、「森を見る分析」そのものではなく、それは、いわばそのた

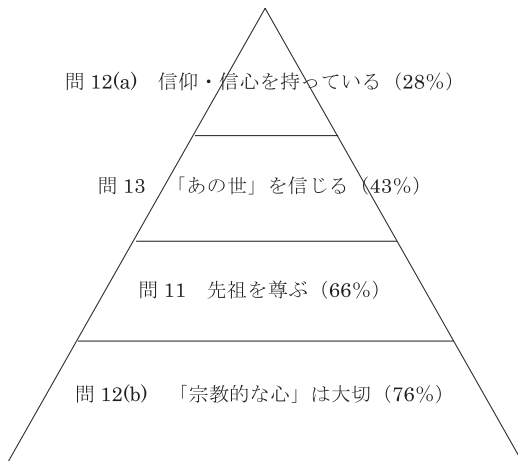


図1 日本における宗教意識の諸相のピラミッド

めの準備作業ともいべきものであった。では、そのような「森を見る」という視座に立つ「記述分析」は、どのようにして可能となるであろうか。ここでは、つぎのような方法で、回答の結果を視覚的に描き出すことを試みる。それは、4つの質問項目に対する回答結果を、それぞれの質問項目に対する肯定的な回答の%の「大きさ」に合わせて、下層から上層へ積み上げ、ピラミッドの形で図形的に表示するという方法である。結果は図1のとおりである。

確かに、このような図形で表わすならば、日本人の宗教意識の諸相についての全体像というべきものが、具体的な形でイメージできることになる。それは、一方のピラミッドの最下層の「宗教的な心は大切」という回答(76%)と、他方のその最上層の「信仰・信心を持っている」という回答(28%)の2つの極の存在を示しており、その2つの極の中間に、「先祖を尊ぶ」という回答(66%)と「あの世を信じる」という回答(43%)が位置づけられる形となっている。

因みに、「先祖を尊ぶか」という質問項目に対する回答は、「尊ばない」が12%、「普通」が23%、「尊ぶ」が66%となっているので、「普通」という回答の内容をどのように理解するかによって、回答結果の「解釈」が大きく違ってくる。もし、「普通」を「尊ぶ」というポジティブな回答傾向に含むべきものとするならば、その結果は、両者が加算されて89%となり、当然、ピラミッドの最下層に位置づけられることになる。しか

し、「宗教的な心は大切」という質問項目に対する回答が76%というところから考えるならば、「先祖を尊ぶ」+「普通」の89%には、「宗教的な心は大切でない」という回答者も含まれていることになる。こうしてみると、「先祖を尊ぶか」という質問に対して「普通」と答える回答者には、「日本的な信仰・信心」としての「先祖崇拜」の気持ちを持っている人たちがばかりでなく、それを単に「日常生活における伝統的な慣習」としての「儀礼」にすぎないと思う人たちもいるであろう。そうだとするならば、この後者の人たちの回答傾向は、欧米の宗教社会学の「世俗化理論」によって説明されるものということができる。こうして、ここでは、「日本における宗教意識の諸相のピラミッド」に、「先祖を尊ぶか」という質問に対して「普通」と答える回答者は含めないこととするのである。

以上の議論を踏まえて、もう一度、「日本人の宗教意識の諸相のピラミッド」に目を向けるならば、このピラミッドは、「底辺」から「頂点」に向ってのそれぞれの項目に対する肯定的な回答者の%が「大」から「小」へと減少していることを示しているのであるが、じつは、ここで重要なポイントは、肯定的な回答者の%が「高い」項目は、「幅の広い宗教意識」という意味内容を含む項目として性格づけられるのに対して、肯定的な回答者の%が低い項目は、「幅の狭い宗教意識」という意味内容を含む項目として性格づけられるということである。

このような項目の性格づけは、政治学の領域において三宅一郎(1998)によって提案された「政党支持の幅」という独創的な考え方を踏まえたものである。そして、このような「幅」という分析概念の転用は、現代における宗教意識の探究という課題にとっても、きわめて有用なものであるといわなければならない。以下、この点について、筆者の議論を展開してみたい。

現在、欧米の宗教社会学の領域においても、「宗教意識という概念の範囲(幅)をどこまでとするか」という議論がでてきている。このような議論の背景には、欧米の宗教社会学における宗教の変化に関する諸理論の出現があった。これらの諸理論は、①世俗化(secularization)理論：宗教

の衰退に関する理論、②宗教変形 (transformation) 理論: 「伝統的な宗教」にとってかわって、「新しい宗教」が出現するという理論、③宗教市場 (market) 理論: 宗教の変化は、その需要によって決まるのではなく、むしろ供給によって決まるとする理論、の3つにまとめられる (真鍋, 2010; Jagodzinski と真鍋, 2015 b)。ここで、②の「宗教変形理論」に注目するならば、このような理論の萌芽は Luckman、赤池、スインゲドー訳 (1967=1976) にまで遡ることができる。Luckman は、宗教の変化をその社会的な「形態」の変化——つまり、宗教が私化 (privatize) され、個人化 (personalize) され、それゆえに社会的に見えなく (invisible) なってきた、という変化——として捉えた。

このような宗教の変形についての考え方を、新しい視座からさらに展開したのが、「世界価値観調査」の主宰者 R. Inglehart であった。Inglehart は、社会の発展にともなって、人生の意味や目的について深く考えるようとする人びとは増えていくが、じつはそのような人びとは、伝統的な信仰や宗教集団に背を向ける人びとであるという。こうした考え方にもとづいて提案されたのが、つぎのような質問項目であった。

問 42 (世界価値観調査の日本調査の質問番号)

あなたは、人生の意味や目的について考えることがどのくらいありますか。

この質問項目で捉えられる人びとの宗教意識は、Inglehart の用語でいうならば、「ポスト近代化の時代の宗教意識」と呼ばれるものであり、それは「伝統的な宗教意識」とは対立概念として位置づけられることになるのである (Inglehart, 1997; Norris and Inglehart, 2004)。

さて、以上のような議論からするならば、欧米の宗教社会学における「ポスト近代化の時代の宗教意識」という概念は、「日本人の国民性調査」における『『宗教的な心は大切か』という質問項目によって捉えられる宗教意識の側面』と内容的にかなり等価 (equivalent) なものといえるのではなかろうかという問題関心がでてくることにな

る。つまり、「ポスト近代化の時代の宗教意識」と『『宗教的な心は大切か』という質問項目の意味する宗教意識』とは、いずれも、文字どおり、「幅の広い宗教意識」といえるのではなかろうかということである。

そして、そうだとするならば、日本と欧米の国ぐににおいて、その宗教意識には、ある意味で「類似点」ともいべきものがでてきているのではなかろうか。そして、このような人びとの宗教意識の変化は、じつは、欧米のキリスト教社会においてよりも、もっと以前に、すでに日本社会において始まっていたといえるのではなかろうか。このような点についての実証的な証拠を提供するという意味において、「日本人の国民性調査」には、国際比較の視座からして、きわめて大きな意義があるといわなければならないのである。

以上のような「宗教意識の幅」という視座からする「宗教的な心は大切」という回答の性格づけをめぐって、もう1つ、日本の宗教意識の特徴という点からして、特筆しておくべきことがある。それは、以下のとおりである。確かに、「宗教的な心は大切」という回答は幅の広い意味内容を含むと考えられるが、まさにその点において、そこにはさまざまな次元が混ざっており、そのような次元の実証的な「細分化」(安田, 1960) の試みは、いまだ手つかずのままとなっているものの、少なくともこの回答が、「反宗教的な意識」あるいは、「宗教に対する否定的な意識」とは対極にある意識の「相」——一般に「相」という用語は、「内面の本質を示す外面のしるし」と説明される (『岩波国語辞典』第4版, 1963年) ——を示すものであることは間違いない。

このような「解釈」を踏まえて、もう一度、回答結果に目を向けるならば、この「宗教的な心は大切か」という質問項目に対しては、多くの人びと (76%) が肯定的な回答——「大切」という回答——をするものの、では、「信仰・信心を持っているか」と尋ねると、この項目に対しては、ほぼそれと同じくらいの人びと (72%) が、今度は否定的な回答——「持っていない」という回答——をする。

こうして、現代日本における宗教意識の特徴の

1つとして、「自分自身は信仰・信心を持っていないが、宗教的な心は大切だと思う」という回答の仕方があげられることになる。このような結果からする限り、日本人の多くが、「信仰・信心を持っていない」という点において、「無宗教」的であるものの、そのような人びとといえども「反宗教的」あるいは「宗教に対して否定的」という「無神論」的な立場をとっているわけではない、といわなければならないのである。

日本における宗教意識のピラミッドの「底辺」と「頂点」に位置する2つの質問項目に対する回答結果について、以上のように「解釈」しておくとして、では、この2つの項目の間に位置する「先祖を尊ぶ」と『あの世』を信じる」をどう「解釈」するかが、つぎの課題となる。

この点については、ここでは、以下のような議論を試みるにとどめる。

まず、「先祖を尊ぶ」という回答(66%)については、それは、いわば日本の伝統的な宗教意識の1つとして、その「社会化(socialization)」と「継承(succession)」が、現在でも継続されており、Bellah、河合訳(1970=1973)のいうところの「市民宗教(civil religion)」——なぜ、日本でこのような概念化の試みがないのであろうか——という意味合いを持つに到っているという仮説をあげることができるであろう。

つぎに、『あの世』を信じる」という回答(43%)については、そもそも「あの世」がどのようなものかに関して、多様な信念が存在してきたといわれている(中村, 2018)。ここでは、それら多様な信念のなかから、2つの対照的なタイプを仮説的にあげておきたい。

その1つは、伝統的な宗教意識における典型的な「あの世」のイメージの存続で、それはとくに高年層の人びとによって担われるものである。

そして、もう1つは、マンガやアニメ、あるいはインターネット空間といった領域に織り込まれている「あの世」のイメージとの接触、さらに広い意味でのスピリチュアリティにかかわる思想・事象・運動との接触などの機会をとおして培養(cultivate)されてきた新しい宗教的な感覚の出現で、それはとくに若年層の人びとによって担われ

るものである。

さて、以上においては、ピラミッドの形で示された日本人の宗教意識の4つの質問項目に対する肯定的な回答の%の「大きさ」をめぐって、筆者の独自の「解釈」を試みた。しかし、いうまでもなく、このような「解釈」は、今後のデータ分析によって実証的に確認されることになるはずの「仮説」である。

最後に、今後に残されたもう1つの課題についても指摘しておきたい。それは、以下のような実証的な分析課題である。

宗教意識に関する質問諸項目を、それらに対する肯定的な回答の%の大きさに応じてピラミッドの図形に位置づけていくという方法は、繰り返しになるが、日本における宗教意識の諸相の全体像(つまり「森」)の概観のために便宜的に考案されたものであって、それ以上のものではない。具体的にいうならば、それは、ピラミッドの図形の最も下の層の人たちの一部が下から2番目の層へ、そしてまたその層の人たちが下から3番目の層へとというように、順次、下の層から上の層へと移っていく、いわば「宗教意識の深化モデル」ともいうべきものではない。しかし、それにもかかわらず、そのような可能性を探るデータ分析は、きわめて興味深い試みといわなければならない。

じつは、筆者は、かつて広告の受容過程のモデルである「AIDMA 図式」の実証的な確認において、同様のアイデアを採用したことがある。そこで、筆者が利用した統計的な技法は、「クロス集計(Cross-Tabulation)」「POSA (Partial Order Scalogram Analysis)」「SSA (Smallest Space Analysis)」などであった(真鍋, 1993)。本稿のテーマである「宗教意識」についても、このようなアイデアにもとづくデータ分析を試みるならば、いわば便宜的なモデルであった「ピラミッド図形」を、実質的なモデルとして確立していく可能性が拓けていくことになるであろう。

2. 日本における宗教意識の構造

「日本人の国民性調査」のデータ分析のつぎの段階は、「森を見る分析」のもう1つのタイプ、

つまり「構造分析」という行き方である。ここで、「構造分析」という用語は、前のセクションで取りあげた宗教意識に関する4つの質問項目の相互間の関係についての統計的分析ということの意味する。

では、日本人の宗教意識の探究という本稿の課題にとって、「構造分析」という行き方には、どのような意味があるのだろうか。

ここで、1つの比喩的な例をあげることにする。われわれが日常生活のなかで、何か「甘いもの」を思い浮かべるとするならば、例えば「チョコレート」があり、「アイスクリーム」があり、「和菓子」がある。これらは、すべて、「甘いもの」であることに変わりはない。しかし、それらがそれぞれ違った「甘さ」を持つものであることもまた否定できない。したがって、ここでおしなべて「甘い」という概念について、それを客観的に測定しようとするならば、「糖度計」が利用されることになる。しかし「チョコレート」「アイスクリーム」「和菓子」のそれぞれの固有の甘さは、どのように測定することができるだろうか。

ある意味で、このような「甘さ」についての視座は、「日本人の国民性調査」で用いられている4項目についても適用可能なのではないであろうか。つまり、これら4項目は、すでにそれらの理論的な意味の考察のところで述べたように、それぞれが固有の意味内容を含ものであることは間違いない。しかし、それと同時に、それら4項目が、共通の意味内容——例えば *religiosity*、*transcendancy*、*sacredness* などを——含んでいることもまた否定できないであろう。こうして、宗教意識のこの後者の側面に焦点を合わせる分析の行き方こそが、まさにここで「構造分析」という用語で呼んでいるものにほかならないのである。

では、このような「構造分析」は、具体的にはどのように進められるのだろうか。ここでは、人びとの「ものの見方・考え方・感じ方・行動の仕方、そしてそれらの背後にあるとされる価値観」の研究領域において開発されてきたデータ分析の技法を、広く利用することを試みたい。それらは、以下のようなものである。

- ・ 相関マトリックス
- ・ 尺度分析
- ・ 因子分析
- ・ クローンバックの α 係数

しかし、本稿では、これらの技法を用いたデータ分析の結果の検討に先立って、欧米の宗教意識を研究領域においては、これらの技法の利用は特別の意味を持つものであったということを確認しておきたい。それは、一言でいうならば、欧米のキリスト教社会においては、人びとの宗教意識を捉えるために作成されてきた質問諸項目は相互に高い相関関係を示し、そこからは1因子が抽出され、クローンバックの α 係数の値も大きく、ほぼ完全な尺度（スケール）を構成するということが、繰り返し見出されてきたということである。つまり、このようなデータ分析の技法によって、欧米においては、人びとの宗教意識と呼ばれるものが、きわめて明確で、堅固で、盤石であることが確認されてきた。そして、このような質問諸項目間の関係の「様相」こそが、「構造」と用語で呼ばれるに相応しいと考えられるようになったのである。

ところが、時を経て、欧米のキリスト教社会にあっても、このような宗教意識の「構造」にある変化の兆候が観察されるようになってくる。これまで欧米の宗教意識を表現する場合に用いられてきた「信念体系」という用語が、まさにその「体系」という点において、疑問視されるようになってくるのは、まさにこのようなコンテクストにおいてであった。こうして、すでに述べたように、欧米の宗教社会学において、このような宗教意識の変化に関する諸理論——「世俗化理論」「宗教変形理論」「宗教市場理論」など——の構築の試みが始まった（真鍋, 2010; Jagodzinski と真鍋, 2015 b) ののである。

では、宗教意識の「構造」という方法論的な視座はまったく無用なものとなったのかというと、決してそうではない。じつは、このような方法論的な視座を設定したからこそ、上述のような欧米のキリスト教社会における宗教意識の変化の観察が可能となったのである。

以上の議論を踏まえて、つぎに「日本人の国民

性調査」における宗教意識に関する質問諸項目についての「構造分析」を、具体的に進めていきたい。

(1) 相関マトリックスによる検討

相関マトリックスは、「 n 個の変数の相互間のすべての単純相関係数を $n \times n$ のマトリックスの形に示したもの。対角線に関して対称をなし、かつ対角線上の値は1である」(安田と原、1982)と説明される。

ここでは、ひとまず、「日本人の国民性調査」の宗教意識の4項目を用いて、——質問番号の順に並べて——「相関マトリックス」を作成した。それが表2である。ここでは、この相関マトリックスを、つぎの2つの段階で検討していく。

①相関係数の正負の符号の検討

「相関マトリックス」における項目(変数)の数を n とすると、その組み合わせの数は全部で $n(n-1)/2$ となる。ここでは n が4項目であるので、その組み合わせの数は6となる。そして、表2からするならば、これら6つの相関係数の「符号」はすべてプラスとなっていることがわかる。このことは、宗教意識を捉える(測定する)質問諸項目が、それぞれ相互に「排他的」であるよりも、むしろ「累積的」であることを示している。具体的にいうならば、ある質問項目についての人びとの回答が肯定的なものであるとしても、別の

質問項目については、それが否定的なものになるかということ、結果はそうではなく、ある質問項目に肯定的であるならば、ほかの質問項目に対しても肯定的であるという回答の傾向が見られるということである。もちろん、特定の個人についていうならば、それらが相互に「排他的」な場合もありうるであろう。ところが、回答傾向を人びとの集合現象として捉えるならば、個人の特性(trait)は消えて、結果として、ここに見られるような「累積的」な傾向が観察されることになるのである。

社会測定の研究領域における先駆的な研究者の一人である L. Guttman は、「相関マトリックス」に観察されるこのような現象を、人間行動——質問紙調査という方法で捉えられる人間行動——の「第一の法則」と呼んだ(Levy, 1994; 真鍋, 2002)。こうして、ここでは、宗教意識を捉える質問諸項目についても、「第一の法則」が成り立つことが確認されたのである。そして、「第一の法則」が成り立つということは、そのような質問諸項目が共通の内容——いうまでもなく、ここでは“religiosity”という内容——を含むものであるということがいえるということである。

②相関係数の数値の「大きさ」の検討

「相関マトリックス」に示された係数の値は0.3台が1ケース、0.2台が2ケース、0.1台が3ケースで、相関係数の値は必ずしも高いものとはいえ

表2 宗教意識の質問諸項目間の関係の相関マトリックス (I)

		Q 11 先祖を尊ぶか	Q 12 a 信仰・信心を 持っているか	Q 12 b 「宗教的な心」は 大切か	Q 13 「あの世」を 信じるか
Q 11 先祖を尊ぶか	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N				
Q 12 a 信仰・信心を 持っているか	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	.204*** .000 1568			
Q 12 b 「宗教的な心」は 大切か	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	.219*** .000 1368	.306*** .000 1381		
Q 13 「あの世」を 信じるか	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	.199*** .000 1461	.145*** .000 1479	.176*** .000 1296	

*** $p < 0.01$, ** $p < 0.05$, * $p < 0.1$

ない。この結果からするならば、日本人の宗教意識をここでの4項目で捉える限りにおいては、その「構造化のレベル」は必ずしも高いものとはいえないであろう。

(2) 「尺度分析」による検討

以上のような相関係数の値の「大きさ」の検討の仕方とは異なる「質問項目間の関係」の検討の仕方もある。それは、これら4項目による「尺度化」の可能性の検討である。そこで、4項目の順番を入れ替えて、「相関マトリックス」を作り直してみる。これが表2である。

この表では対角線上の相関係数が1になっていることはいうまでもないが、それら以外の相関係数の値は、行においても列においても対角線から離れていくにつれて、段階的に小さくなっていることがわかる。Guttman は、このような「単純ランク・オーダー体系」を示している諸項目間の相互の関係の構造を、「シンプレックス (Simplex)」と呼んでいる。そして、Guttman の「ファセット・セオリー (Facet Theory)」からするならば、このように諸項目間の相互の関係が「シンプレックス」の性質を示している場合には、それらを「尺度分析 (Scale Analysis)」に当てはめると、これら諸項目は「一次元の尺度」を構成するものであることが確認されるという。そこで、これら4つの項目のそれぞれについて、「肯定的な回答」を1点、「否定的な回答とそれ以外の回答」を0点

として割り当てると、最高4点、最低0点の得点が得られる。この得点を用いて、「尺度分析」を行なうならば、再現性係数 (coefficient of reproducibility) は、

$$1 - \frac{\text{構成された尺度によっては予測できない反応(誤反応)の総計}}{\text{回答者全員が4項目に回答した総計}}$$

という計算式で計算され、それは0.83となる。再現性係数は、一般に、0.90以上であれば、「ガットマン・スケール」が構成されるといわれている。ただ、実用的な観点から見た場合に、社会現象については0.90以上という高い数値を得ることは困難であることから、それが「0.90ないし0.80の間にあるような、いわゆる『弱い』尺度が用いられることがある」(Duverger, 深瀬, 樋口 訳, 1964=1968, p.286)。従って、ここでの再現性係数の値はやや低く、これら4項目からなる「ガットマン・スケール」は「弱い」尺度ということになる。

(3) 「因子分析」による検討

以上の「相関マトリックス」と「尺度分析」を踏まえて、つぎに、もう1つの統計的技法による検討に移る。それは、「因子分析」である。

因子分析の結果は、表4のとおり、1因子が抽出されたことを示している。そこで、この結果を、①その1因子で全体の「分散 (variance)」の何%までが説明されるか——何%の説明力を持つ

表3 宗教意識の質問諸項目間の関係の相関マトリックス (II)

		Q 12 a 信仰・信心を 持っているか	Q 12 b 「宗教的な心」は 大切か	Q 11 先祖を尊ぶか	Q 13 「あの世」を 信じるか
Q 12 a 信仰・信心を 持っているか	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N				
Q 12 b 「宗教的な心」は 大切か	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	.306*** .000 1381			
Q 11 先祖を尊ぶか	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	.204*** .000 1568	.219*** .000 1368		
Q 13 「あの世」を 信じるか	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	.145*** .000 1479	.176*** .000 1296	.199*** .000 1461	

***p<0.01, **p<0.05, *p<0.1

表 4 宗教意識の質問諸項目の因子分析

説明された分散の合計

因子	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和		
	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%
1	1.628	40.70	40.70	.860	21.51	21.51
2	.885	22.14	62.83			
3	.791	19.78	82.61			
4	.696	17.39	100.00			

因子行列

	因子 1
Q 11 先祖を尊ぶか	.430
Q 12 a 信仰・信心を持っているか	.500
Q 12 b 「宗教的な心」は大切か	.554
Q 13 「あの世」を信じるか	.344

ているか——、②それぞれの質問項目ごとの「因子負荷量 (factor loading)」はどのくらいであるか、の2点に焦点を合わせて検討する。

まず、①については、この1因子によって説明される分散は41%となっている。これまでの「経験則 (a rule of thumb)」からするならば、1つの因子で全体の分散の41%以上が説明されるというのは、かなり高いレベルであるといえることができる。

つぎに、②については、日本では、一般に、つぎのように説明される。「因子負荷量は各項目と因子との相関を表わした数値であり、-1から1をとる。因子負荷量は0.35から0.40以上であると、抽出した因子とのかかわりが強いと考える」(渡邊, 2012)。この基準からするならば、ここでの結果については、どの項目も抽出した因子との関わりはかなり強いものということになる。

しかし、それはどこまでも日本の基準からしての判断であって、ここでの結果をこれまでの欧米の国々への結果とくらべてみるならば、「日本人の国民性調査」での「因子負荷量」の値は、かなり低いレベルにとどまっているといわざるをえない。もちろん、調査時期と、具体的な質問諸項目の内容 (そのワーディング) は異なるものの、例えば、1998年の「国際社会調査プログラム (International Social Survey Programme: ISSP)」のデータ分析の結果 (Jagodzinski と真鍋, 2013 a) からするならば、「西ドイツ」「フランス」「アメリ

カ合衆国」においては、「因子負荷量」は、多くの場合、0.7から0.8の値を示している。そして、この研究領域における欧米の「経験則」では、「因子負荷量は0.6以上でなければならない」とされている。

因みに、ISSPのデータ分析での「日本」の「因子負荷量」は、多くの場合、0.5~0.6となっており、この結果とくらべても、今回の「日本人の国民性調査」での「因子負荷量」の値はやや低いレベルにとどまっているといわなければならないのである。

(4) 「クローンバックのα係数」による検討

以上の分析結果を踏まえて、最後に、もう1つの検討に移る。それは、信頼性係数の1つである「クローンバックのα係数」による検討である。

繰り返しになるが、本稿での問題関心は、「『日本人の国民性調査』の宗教意識の4つの質問諸項目間には、どのような関係の構造を見ることができようか」というものである。

そこで、「日本人の国民性調査」で尋ねられた宗教意識に関する4つの質問項目間に「内的整合性」が確認されるとするならば、それら諸項目は、「同一のもの」——つまり、「日本における religiosity」という同一のもの——を捉えている (測定している) と考えられるのである。そして、このような質問諸項目間の「内的整合性」の判断のためには、「信頼性係数」が利用される。信頼

性係数としては、いろいろなものが開発されてきているが、本稿ではその最も代表的な「クローンバックの α 係数」を用いる。では、 α 係数がどのくらいの値であれば、「内的整合性」が確認できたといえるかという点については、一般に0.7以上（しかし0.6以上で許容できる）という基準が用いられている（三輪，2007，渡邊，2012）。

今回の分析での「クローンバックの α 係数」は、0.457という値を示しており、したがって、ここで4項目については「内的整合性」のレベルはかなり低いものといわざるをえないのである。

以上、統計的な技法を用いた「日本人の国民性」の4項目についての検討の結果から、これら4項目の相互間の関係の「構造」は、必ずしも明確で、堅固で、盤石なものとはいえず、それら4項目で「日本人の religiosity」が捉えられるかという点についても問題なしとしないということがわかった。

では、なぜ、このような結果がでてくることになったのであろうか。このような問いをめぐっては、前稿の「理論的考察」と「方法論的考察」に対応させて、以下の2つの側面からの探索が求められることになるであろう。

(1) 「日本人の国民性調査」で用いられた宗教意識に関する4つの質問項目が、

①それぞれのその意味内容において、かなり異質なものである——本稿で用いた比喩的な表現を、再度、ここで利用するならば、「甘さ」という点での共通点がありながら、「チョコレート」「アイスクリーム」「和菓子」のそれぞれの固有の「甘さ」はかなり異質のものである——からではなかろうか、

②これら4つの質問項目は、必ずしも「理論的・体系的・法則定立的」に選ばれたものではなかった——この点については、「日本人の国民性調査」が「分析志向的」であるよりも、「記述志向的」な調査研究としての性格が強いものであるということがかかわっていると考えられる——からではなかろうか、
というところに焦点を合わせて探索を進めてい

く。

(2) これら4つの質問項目が、その「形式」において、どのようなものとなっているか、つまり、

①Guttmanの用語でいうならば、どのような人間行動——質問紙調査によって捉えられる人間の行動——の「種類 (component)」を捉えようとしているか、

②回答の選択肢の型がどのようなになっているか——0ポイントがスケールの端に置かれる型であるか、それとも、スケールの中に置かれる型であるか——、
というところに焦点を合わせて探索を進めていく。

以上のような探索は、二次分析としてのデータ分析にとっての、きわめて重要な課題といわなければならないものといえよう。

3. 日本における宗教意識の性格

前のセクションでは、日本における宗教意識の4項目について、それらの「信頼性」の検討を行なった。その結果、これら4項目については、「信頼性」のレベルは必ずしも高いものとはいえないことが判明した。

では、「日本人の国民性調査」における宗教意識に関する4項目は、日本人の宗教意識の measurement instruments としては、方法論的には、問題のあるものといわなければならないのであろうか。この点については、「信頼性」とは別の角度からの検討も必要となる。それが、このセクションでの、これら4項目の「妥当性 (validity)」の検討である。ここでは、とくに4項目の「構成概念妥当性 (construct validity)」の検討を試みる。

では、社会科学の領域において、構成概念の測定の妥当性は、どのようにして判断されるのであろうか。この点については、「ある構成概念がほかの変数と理論的に予測される関係を示しているとするならば、その構成概念の測定には妥当性がある」(Lewis-Beck, 1994)と判断するという考え方が一般的である。ここでは、この線上で、具体的な分析を以下のように進めていく。

まず、ある変数とほかの変数との関係性の確認

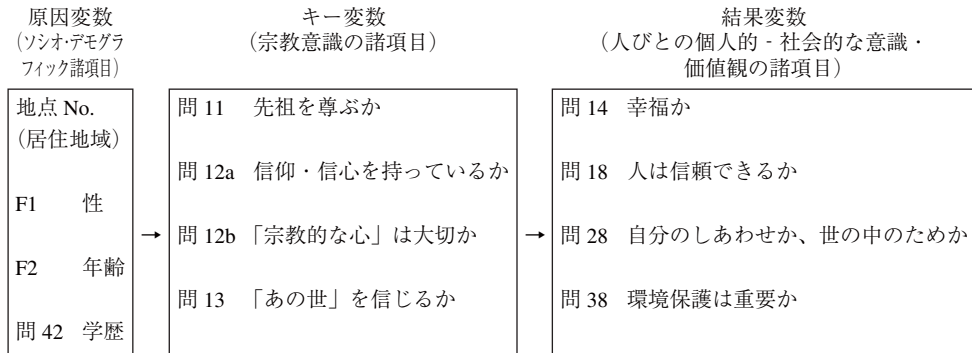


図2 データ分析のための仮説的図式

においては、そのための「青写真」あるいは「ロードマップ」の役割を果たす「仮説的図式」が必要となる。それは、「宗教意識に関する4項目」を「鍵（キー）変数」として設定し、その「原因変数」と「結果変数」とを組み合わせて構成される。それが、図2の「データ分析のための仮説的図式」である。

この「仮説的図式」においては、「原因変数」としては、「宗教意識」の規定要因と考えられる「ソシオ・デモグラフィック諸項目」——「F1性」「F2年齢」「問42学歴」「地点No：居住地域の人口規模」——を、そして「結果変数」としては、「宗教意識」によって規定されると考えられる「人びとの個人的・社会的な意識や価値観の諸項目」——「問14幸福か」「問18人は信頼できるか」「問28自分のしあわせか、それとも、世の中のためか」「問38環境保護は重要か」——を取りあげる。ここでの規定関係は、左から右へ、つまり「原因変数群」から「宗教意識変数群」へ、そして「宗教意識変数群」から「結果変数群」へ、という流れで考えられている。こうして、このような関係性で示される理論仮説の確認が、ここでの分析課題となる。

では、このような理論仮説は、具体的にはどのように構成されたかということ、それは、「宗教意識」の研究領域における先行研究——理論研究と実証研究——に関する「文献研究（literature survey）」にもとづいて整理された以下のような諸「命題」を踏まえてなされたのである。なお、このような諸命題については、筆者による「宗教意識／宗教性」をめぐる巻末の諸論文を参照された

い。なお、ここで「宗教意識」と「宗教性」を併記したのは、上記の「文献研究」が主として欧文献についてなされたからにはほかならない。

- A. 「ソシオ・デモグラフィック変数」と「宗教性／宗教意識」との関係に関する諸仮説
 1. 女性は、男性よりも、宗教性のレベルが高い。
 2. 高年齢層は、若年齢層よりも、宗教性のレベルが高い。
 3. 低学歴層は、高学歴層よりも、宗教性のレベルが高い。
 4. 農村住民は、都市住民よりも、宗教性のレベルが高い。
- B. 「宗教性／宗教意識」と「個人的・社会的な意識や価値観」との関係に関する諸仮説
 1. 宗教性のレベルの高い人は、低い人よりも、幸福感が高い。
 2. 宗教性のレベルの高い人は、低い人よりも、対人信頼感が高い。
 3. 宗教性のレベルの高い人は、低い人よりも、「世の中のためになることをしたい」という志向性が高い。
 4. 宗教性のレベルの高い人は、低い人よりも、環境保護への志向性が高い。

つぎに、図2の「仮説的図式」に示される「ある変数とほかの変数との理論的に予測される関係」をどのように測定するかという問題に答えなければならない。このような変数間の関係性の測

定のためには、さまざまな統計的な方法が開発されてきている。ここでは、より初等的なレベルの分析から始めることにする。それは、つぎのような方法である。

(A) モデルの前半部分の確認のために、「ソシオ・デモグラフィック変数」——①性、②年齢、③学歴、④居住地域——を x 軸に、「宗教性／宗教意識」の変数を y 軸におき、2 変数間の関係を、「宗教性／宗教意識」の「平均値」をプロットした点をつないだ折れ線グラフの形によって示すという方法をとる。

(B) モデルの後半部分の確認のために、今度は「宗教性／宗教意識」の変数を x 軸に、「個人的・社会的な意識・価値観」に関する変数を y 軸におき、同じく 2 数間の関係を、「個人的・社会的な意識・価値観」の「平均値」をプロットした点をつないだ折れ線グラフの形によって示すという方法をとる。

ここでは、以上の (A) と (B) からなる 2 種類のデータ分析の実際について、もう少し具体的かつ詳細に説明しておきたい。じつは、この点には、筆者の実証的研究の手続きについての基本的な考え方ともいうべきものがかわってくる。一般に質問紙調査のデータ分析という場合、これまでは、そのようなデータ分析の「結果 (product)」についてのみ報告するものが多く、データ分析の「過程 (process)」——とくに、その「具体的な手順 (procedure)」——について報告するものは少なかった。しかし、社会科学の科学化は、じつはこの点を待って、初めて可能となる。いうまでもなく、それは「科学」と呼ばれる人間の知的営為が、その重要な要件の 1 つとして「再現性 (reproducibility)」——だれがやっても、同じ方法をとる限り、同じ結果に到達するという——を要求しているからにはほかならない。こうして、筆者はかねてから社会科学の領域の実証的研究における「プロセス提示型論文」——海野道郎 (1981) の用語——の重要性を主張してきた。

本稿では、このような考え方の線上で、上述の (A) と (B) のデータ分析の具体的な手順を記しておきたい。

1) まず、x 軸と y 軸からなる座標軸を設定する。x 軸には原因変数のカテゴリを等間隔に示し、y 軸には結果変数の選択肢に与えた点数の平均値を示す。(A) では、原因変数は「ソシオ・デモグラフィック諸項目」、結果変数は「宗教意識の諸項目」、そして、(B) では、原因変数は「宗教意識の諸項目」、結果変数は「個人的・社会的な意識・価値観の諸項目」とする。なお、原因変数としてのそれぞれの「ソシオ・デモグラフィック諸項目」の rank order の方向はつぎのとおりとする。

地点 No (居住地) : 6 大都市 → 町村

F1 性 : 男 → 女

F2 年齢 : 20 歳台 → 70 歳以上

問 42 学歴 : 短大・大学・大学院 → 小・中学校

2) それぞれの結果変数の選択肢に与える点数は、つぎのとおりとする。なお、それぞれの rank order の方向は () 内に示した。

問 11 先祖を尊ぶか? (尊ばない → 尊ぶ)

1. 尊ぶ → 3 点

2. 普通 → 2 点

3. 尊ばない → 1 点

問 12 (a) 信仰・信心を持っているか? (持っていない・信じていない → 持っている・信じている)

1. 持っている・信じている → 2 点

2. 持っていない・信じていない → 1 点

問 12 (b) 「宗教的な心」は大切か? (大切でない → 大切)

1. 大切 → 2 点

2. 大切でない → 1 点

問 13 「あの世」を信じているか? (信じていない → 信じている)

1. 信じる → 3 点

2. どちらともきめかねる → 2 点

3. 信じていない → 1 点

問 14 幸福か? (不幸 → 幸福)

1. 幸福 → 2 点

2. 不幸 → 1 点

問 18 人は信頼できるか? (用心 → 信頼)

1. 信頼できる → 2 点

2. 用心する →1点

問28 自分のしあわせか、世の中のためか？
(自分のしあわせ→世の中のため)

1. 自分のしあわせ →1点
2. 世の中のため →2点

問37 環境保護は重要か？(重要ではない→非常に重要)

1. 非常に重要 →4点
2. 重要 →3点
3. あまり重要でない →2点
4. 重要でない →1点

3) それぞれの x 軸のカテゴリに対応する y 軸の平均値を計算し、その値をグラフ上にプロットし、これらの点を結んで、折れ線グラフを描く。

以上のような手順で作成された図3～図34の「折れ線グラフ」から、どのような知見が読み取れるであろうか。そして、そのような知見から、初めにあげた先行諸研究にもとづく諸「仮説」(命題)は、実証的に確認されることになるであろうか。以下、それぞれのグラフについて、ごく簡潔にその結果を報告する。

A. 「ソシオ・デモグラフィック諸項目」と「宗教意識の諸項目」との関係

(1) 居住地域

①「居住地域」と「先祖を尊ぶ」

「居住地域」の人口規模が小さくなるにつれて、「先祖を尊ぶ」の平均値がわずかに高くなる。

②「居住地域」と「信仰・信心」

「居住地域」の人口規模が小さくなるにつれて、「信仰・信心」の平均値がわずかに高くなる。

③「居住地域」と「宗教的な心は大切」

「6大都市」から「20万未満の市」に向って、「大切」の平均値がわずかに高くなるものの、「町村」になると、「大切」のレベルは再び「6大都市」のレベルにまで下がる。

④「居住地域」と「あの世を信じる」

「6大都市」から「20万未満の市」に向かっ

て、「信じる」の平均値がわずかに高くなるものの、「町村」になると、「信じる」のレベルは再び「6大都市」と「20万以上の市」の中間のレベルにまで下がる。

(2) 性

①「性」と「先祖を尊ぶ」

「男性」よりも、「女性」の方で、「尊ぶ」の平均値がわずかに高い。

②「性」と「信仰・信心」

「男性」と「女性」に、「尊ぶ」の平均値の差はほとんど見られない。

③「性」と「宗教的な心は大切」

「男性」よりも、「女性」の方で、「大切」の平均値がごくわずかに高い。

④「性」と「あの世を信じる」

「男性」よりも、「女性」の方で、「信じる」の平均値がかなり高い。

(3) 年齢

①「年齢」と「先祖を尊ぶ」

「年齢」が高くなるにつれて、「尊ぶ」の平均値が高くなる。

②「年齢」と「信仰・信心」

「年齢」が高くなるにつれて、「信仰・信心」の平均値が高くなる。

③「年齢」と「宗教的な心は大切」

「年齢」が高くなるにつれて、「大切」の平均値が高くなる。

④「年齢」と「あの世を信じる」

「60～69歳」と「70歳以上」で「信じる」の平均値が低く、「40～49歳」「50～59歳」そして「20～29歳」でそれが高く、「30～39歳」は両者の中間のレベルとなっている。

(4) 学歴

①「学歴」と「先祖を尊ぶ」

「学歴」が低くなるにつれて、「尊ぶ」の平均値がわずかに高くなる。

②「学歴」と「信仰・信心」

「学歴」が低くなるにつれて、「信仰・信心」の平均値がわずかに高くなる。

③「学歴」と「宗教的な心は大切」

「学歴」が低くなるにつれて、「大切」の平均値がごくわずかに高くなる。

④「学歴」と「あの世を信じる」

「小・中学校」では「信じる」の平均値が低く、「高等学校」ではそれが高く、「大学」は両者の中間のレベルとなっている。

B. 「宗教意識の諸項目」と「個人的・社会的な意識・価値観の諸項目」との関係

(1) 先祖を尊ぶか？

①「先祖を尊ぶ」と「幸福感」

「先祖を尊ばない」よりも、「普通」「尊ぶ」の方で、「幸福感」の平均値がわずかに高い。

②「先祖を尊ぶ」と「対人信頼感」

「先祖を尊ばない」「普通」よりも、「尊ぶ」の方で、「対人信頼感」の平均点がわずかに高い。

③「先祖を尊ぶ」と「自分のしあわせか、世の中のためか」

「先祖を尊ばない」「普通」よりも、「尊ぶ」の方で、「世の中のため」の平均値がわずかに高い。

④「先祖を尊ぶ」と「環境保護」

「先祖を尊ばない」から「普通」、そして、「普通」から「尊ぶ」へという順で、「環境保護」の平均値が高くなる。

(2) 信仰・信心を持っているか？

①「信仰・信心」と「幸福感」

「信仰・信心を持っていない」と「持っている」で、「幸福感」の平均値に差は見られない。

②「信仰・信心」と「対人信頼感」

「信仰・信心を持っていない」よりも、「持っている」の方で、「対人信頼感」の平均値がわずかに高い。

③「信仰・信心」と「自分のしあわせか、世の中のためか」

「信仰・信心を持っていない」よりも、「持っている」の方で、「世の中のため」の平均値がわずかに高い。

④「信仰・信心」と「環境保護」

「信仰・信心を持っていない」よりも、「持っている」の方で、「環境保護」の平均値が高い。

(3) 宗教的な心は大切か？

①「宗教的な心は大切」と「幸福感」

「宗教的な心は大切でない」よりも、「大切」の方で、「幸福感」の平均値がごくわずかに高い。

②「宗教的な心は大切」と「対人信頼感」

「宗教的な心は大切でない」よりも、「大切」の方で、「対人信頼感」の平均値がわずかに高い。

③「宗教的な心は大切」と「自分のしあわせか、世の中のためか」

「宗教的な心は大切でない」よりも、「大切」の方で、「世の中のため」の平均値がわずかに高い。

④「宗教的な心は大切」と「環境保護」

「宗教的な心は大切でない」よりも、「大切」の方で、「環境保護」の平均値がわずかに高い。

(4) あの世を信じるか？

①「あの世を信じる」と「幸福感」

「あの世を信じる」と「信じない」よりも、「どちらともきめかねる」の方で、「幸福感」の平均値がごくわずかに高い。

②「あの世を信じる」と「対人信頼感」

あの世を信じるかどうかは「どちらともきめかねる」よりも、「あの世を信じない」と「あの世を信じる」の方で、「対人信頼感」の平均値が、ごくわずかに高い。

③「あの世を信じる」と「自分のしあわせか、世の中のためか」

「あの世を信じない」から「どちらともきめかねる」、そして「どちらともきめかねる」から「信じる」という順で、「世の中のため」の平均値がごくわずかに高くなる。

④「あの世を信じる」と「環境保護」

「あの世を信じない」から「どちらともきめかねる」、そして「どちらともきめかねる」から「信じる」へという順で、「環境保護」の平均値がごくわずかに高くなる。

以上において、図3～図34の「折れ線グラフ」における、それぞれの2項目間関係についての知見を個別に報告してきた。ここで、それらの全

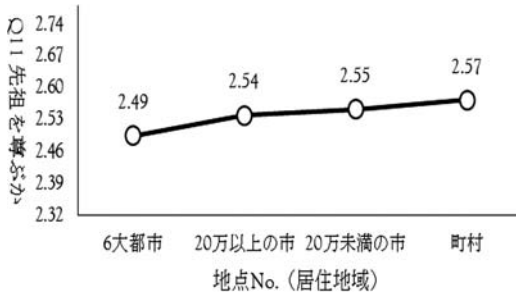


図3 「居住地域」と「先祖を尊ぶ」との関係

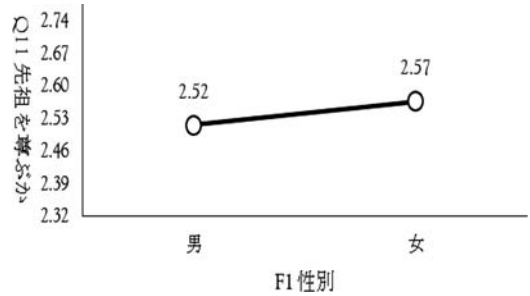


図7 「性」と「先祖を尊ぶ」との関係

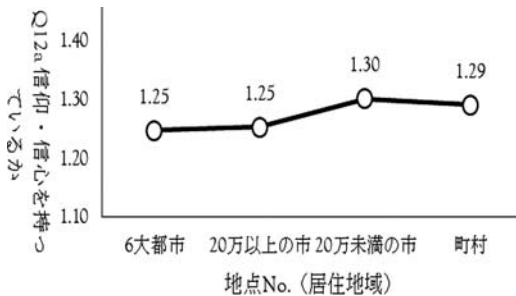


図4 「居住地域」と「信仰・信心」との関係

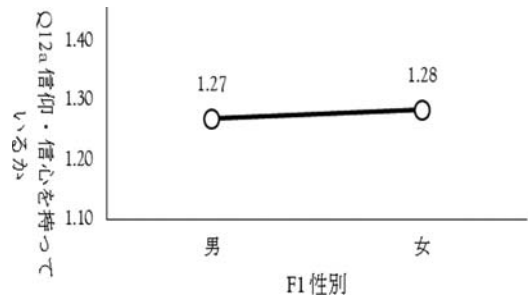


図8 「性」と「信仰・信心」との関係



図5 「居住地域」と「宗教的な心は大切」との関係

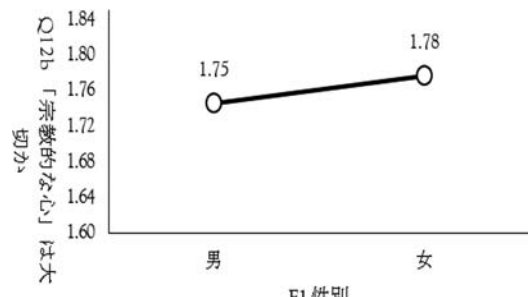


図9 「性」と「宗教的な心は大切」との関係

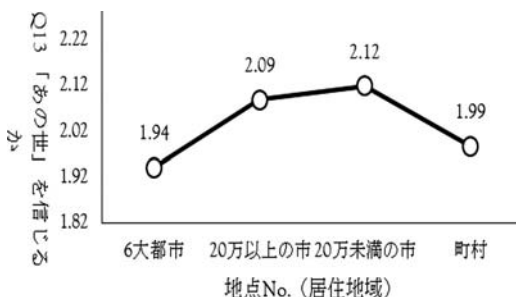


図6 「居住地域」と「あの世を信じる」との関係

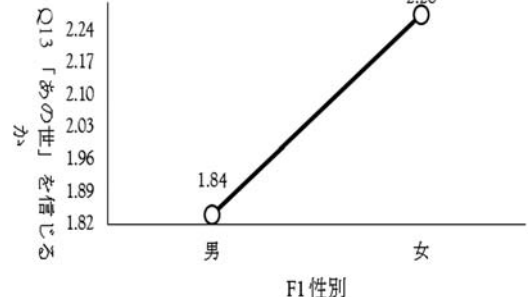


図10 「性」と「あの世を信じる」との関係

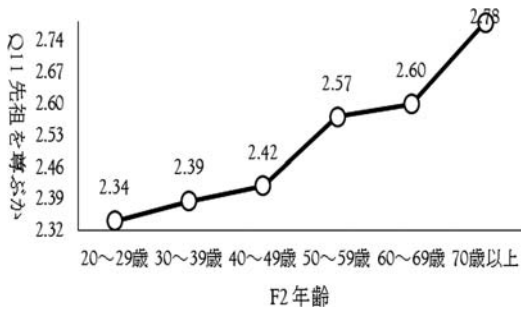


図 11 「年齢」と「先祖を尊ぶ」との関係

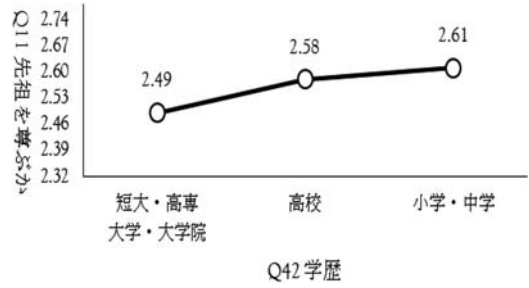


図 15 「学歴」と「先祖を尊ぶ」との関係

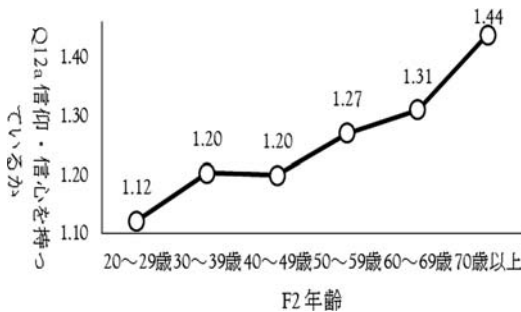


図 12 「年齢」と「信仰・信心」との関係

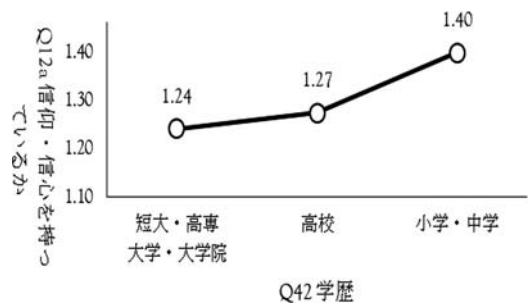


図 16 「学歴」と「信仰・信心」との関係

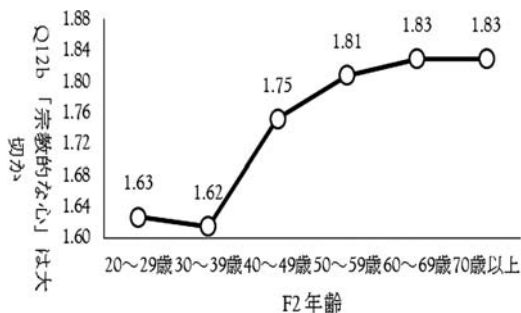


図 13 「年齢」と「宗教的な心は大切」との関係

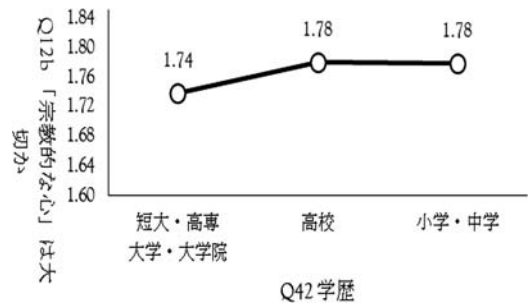


図 17 「学歴」と「宗教的な心は大切」との関係

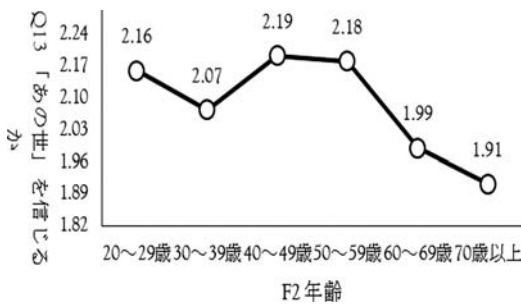


図 14 「年齢」と「あの世を信じる」との関係

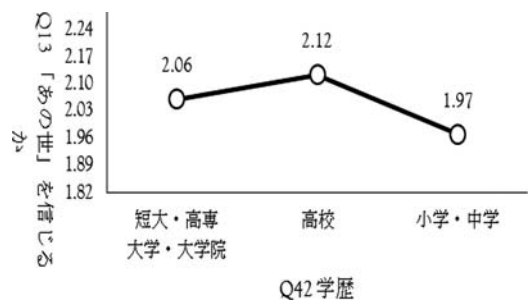


図 18 「学歴」と「あの世を信じる」との関係

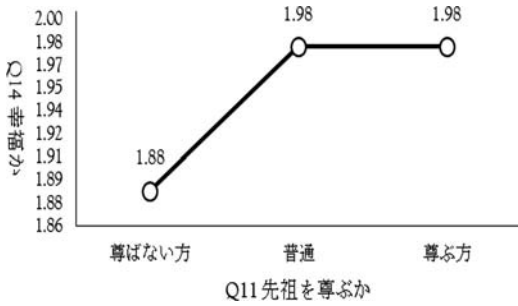


図 19 「先祖を尊ぶ」と「幸福感」との関係

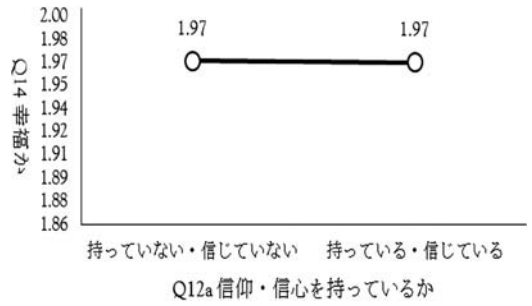


図 23 「信仰・信心」と「幸福感」との関係

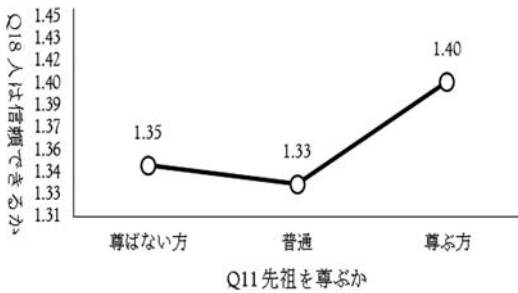


図 20 「先祖を尊ぶ」と「対人信頼感」との関係

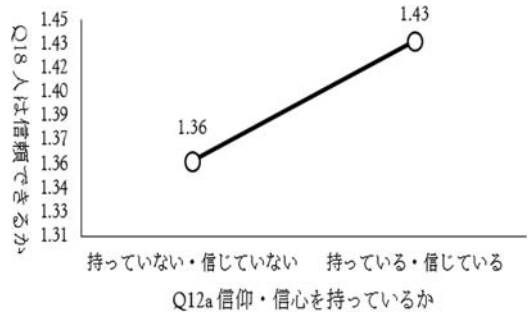


図 24 「信仰・信心」と「対人信頼感」との関係

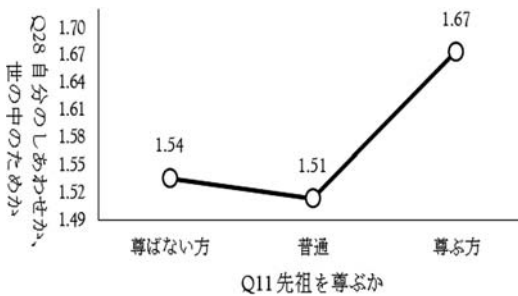


図 21 「先祖を尊ぶ」と「自分のしあわせか、世の中のためか」との関係

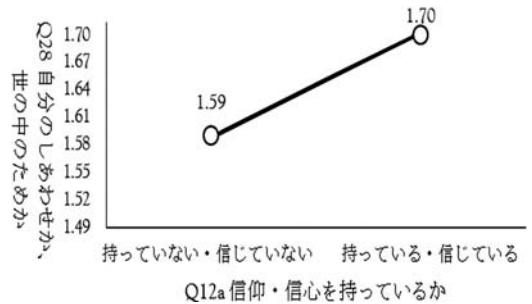


図 25 「信仰・信心」と「自分のしあわせか、世の中のためか」との関係

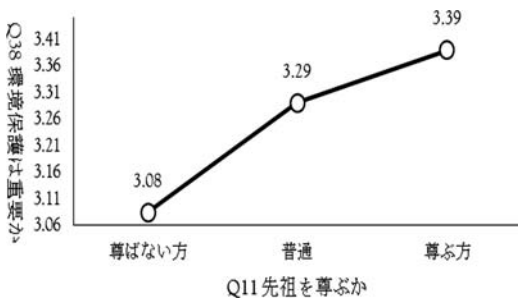


図 22 「先祖を尊ぶ」と「環境保護」との関係

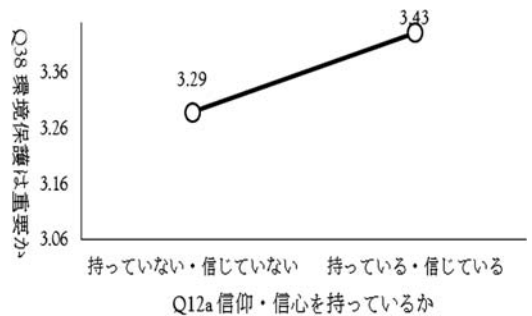


図 26 「信仰・信心」と「環境保護」との関係

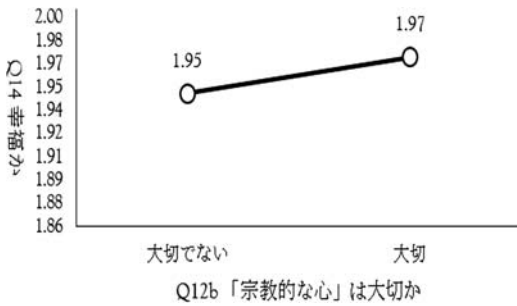


図 27 「宗教的な心は大切」と「幸福感」との関係

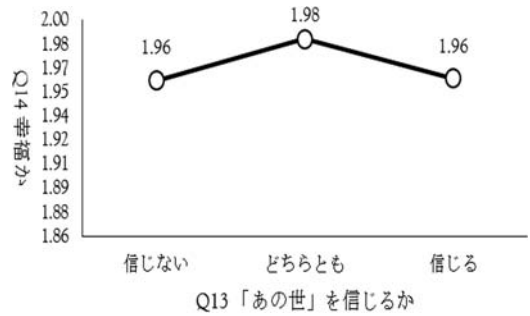


図 31 「あの世を信じる」と「幸福感」との関係

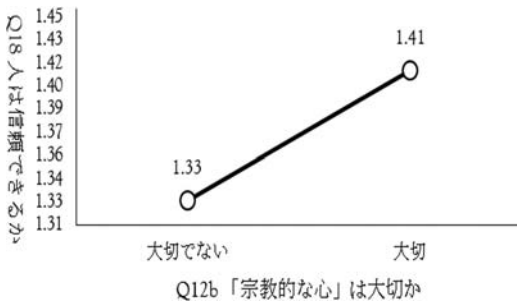


図 28 「宗教的な心は大切」と「対人信頼感」との関係

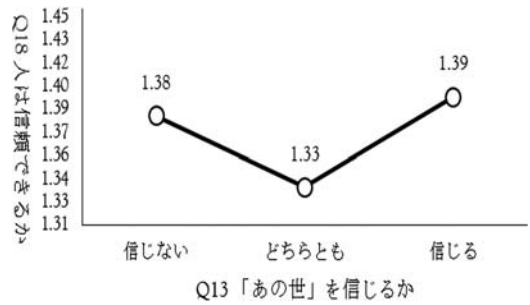


図 32 「あの世を信じる」と「対人信頼感」との関係

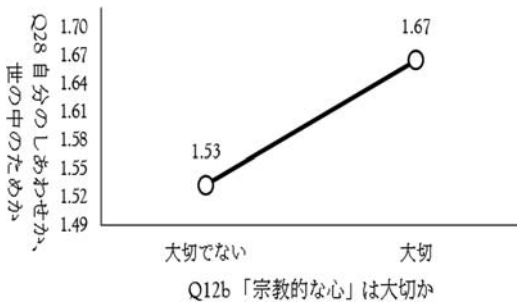


図 29 「宗教的な心は大切」と「自分のしあわせか、世の中のためか」との関係

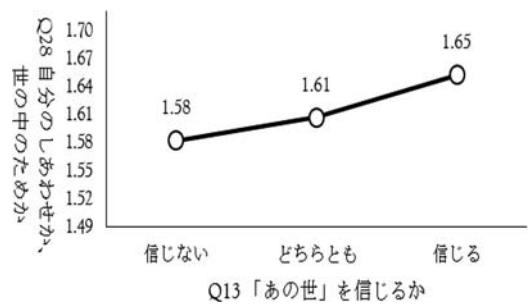


図 33 「あの世を信じる」と「自分のしあわせか、世の中のためか」との関係

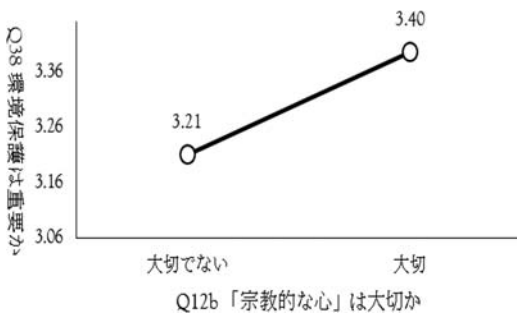


図 30 「宗教的な心は大切」と「環境保護」との関係

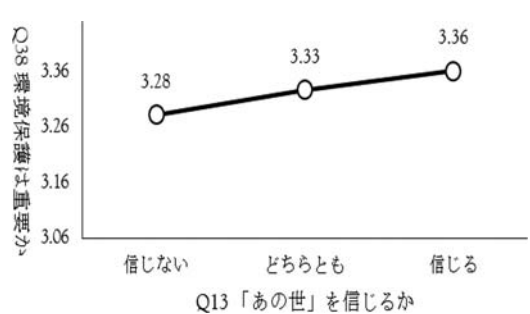


図 34 「あの世を信じる」と「環境保護」との関係

体的な傾向をまとめてみるならば、つぎのようになる。

そもそも、本稿において、このようなそれぞれの2項目間の関係を「平均値をつないだ折れ線グラフ」の形で示したのは、ここでの二次分析としてのデータ分析のねらい・目標・目的が、「鍵変数」として設定した「宗教意識に関する4つの質問項目」の「構成概念妥当性」を検討するというところにあったからにはほかならない。そして、その結果、確かに多くの場合、「折れ線グラフ」は右肩上がりのパターンを示していることがわかった。しかし、それと同時に、そこには、以下のような問題が存在することも明らかとなった。

(1) それぞれの「折れ線グラフ」の右肩上がりのその角度が決して大きなものではなく、それらがほとんどフラットな形となっているケースもあることがわかった。つまり、平均値に差が見られる場合においても、その差は必ずしも大きなものではないということである。いうまでもなく、このような項目間の統計的な関係性を、「平均値をつないだ折れ線グラフ」の形で示すという方法は、それほどリジッドなものとはいえない。しかし、それにもかかわらず、以上のような結果の「読み取り」から、これら項目間の相関関係——そして、そのような相関関係から推論されるところの因果関係——は、決して大きなものではないであろうということが示唆されるのである。

(2) 「折れ線グラフ」が右肩上がりのパターンを示さなかったケース——折れ線グラフの角度、つまり平均値の差が小さいので、それらは「逸脱事例」とまではいえないかもしれない——は、(A)の分析で4ケース、(B)の分析で2ケース、合わせて6ケース見られる。これら6ケースについての、それぞれの2項目間の関係性についてのより詳細な検討は、きわめて興味深い分析課題であるといえよう。ただ、ここでは、それらについては暫く措き、むしろ、それら6ケースうちの5ケースまでが、問13の「あの世を信じるか」という宗教意識の項目と「それ以外の諸項目」との関係を示した「折れ線グラフ」において見られたということに注目しておきたい。こうして、「記

述分析」「構造分析」において見られた問13「あの世を信じるか」という質問項目についての方法的な問題が、ここでも同じように浮き彫りとなったのである。

では、なぜ、「あの世を信じるか」については、そのような問題がでてくることになったのであろうか。この点については、

①「あの世を信じるか」という質問項目の意味内容が、それ以外の宗教意識の質問諸項目のそれとは大きく異なっている、

②問13「あの世を信じるか」という質問項目に対する回答の選択肢の度数分布が、いわゆる「パイ・モーダル」の形を示しており、それ以外の宗教意識の質問諸項目の場合のそれとは大きく異なっている、

という2つの要因がかかわっている可能性が考えられる。このような仮説の実証的な探究は、きわめて重要な今後の課題といわなければならない。

Ⅲ. おわりに

本稿では、「日本人の国民性調査」(第13次調査:2013年実施)のデータを用いて、

(1) 宗教意識に関する質問諸項目に対する回答結果の「記述分析」——質問文とその回答の選択肢の形および度数分布の検討——、

(2) それら回答結果の「構造分析」——それら回答結果の相互間の関係性・内的整合性・信頼性の検討——、

(3) それら回答結果と「外部変数 (external variables)」との「相関分析」——それら回答結果と「原因変数および結果変数として位置づけられる質問諸項目に対する回答諸結果」との理論的に予測される関係性・規定性、そして宗教意識に関する諸項目の構成概念妥当性の検討——、を試みた。

こうして、本稿は、「日本人の国民性調査」における、日本人の「宗教意識」を捉えようとする4つの質問項目に関する methodological な検討をめざすとともに、そのような検討をとおして日本人の宗教意識の諸相・構造・性格についての substantive な探究をめざすものであった。いうまでもなく、データ分析のこれら2つの方向は、相

互に、「切っても切れない」関係にある。方法論を洗練させることによって、分析対象はより深く捉えられることになり、そのような分析対象への問題関心の深化によって、方法論の洗練が促される。

ここでは、このような、質問紙調査のデータ分析における実践的な問題の所在を確認して、いったん筆を置くことにする。

文献

- Bellah, Robert N., 河合秀和訳 (1970=1973) 『社会変革と宗教倫理』 未来社.
- Duverger, Maurice, 深瀬忠一、樋口陽一訳 (1964=1968) 『社会科学の諸方法』 勁草書房.
- Inglehart, Ronald (1997) *Modernization and Postmodernization*. Princeton University Press.
- Inkeles, Alex, 吉野諒三訳 (1997=2003) 『国民性論』 出光書店.
- Jagodzinski, Wolfgang, 真鍋一史 (2013 a) 「宗教性の『測度・指数・尺度』に関する実証的な検討——日本と欧米の国ぐにとの国際比較の視座から——」『関西学院大学社会学部紀要』第117号.
- Jagodzinski, Wolfgang, 真鍋一史 (2013 b) 「国際比較の視座からする宗教性の類似性」『関西学院大学社会学部紀要』第116号.
- Jagodzinski, Wolfgang, 真鍋一史 (2015 a) 「ヨーロッパの国ぐににおける宗教意識の変容——『国際比較調査』のデータ分析——」『関西学院大学社会学部紀要』第120号.
- Jagodzinski, Wolfgang, 真鍋一史 (2015 b) 「ヨーロッパの国ぐににおける宗教と道徳の多元主義——理論的考察と実証的知見——」『関西学院大学社会学部紀要』第122号.
- Levy, Shlomit ed. (1994) *Louis Guttman on Theory and Methodology: Selected Writings*. Dartmouth.
- Lewis-Beck, Michael S. (1994) *Basic Measurement. International Handbooks of Quantitative Applications in the Social Sciences*. Vol.4. Sage.
- Luckman, Thomas, 赤池憲昭、ヤン・スィングドー訳 (1967=1976) 『見えない宗教』 ヨルダン社.
- 真鍋一史 (1993) 『社会・世論調査のデータ解析』 慶應義塾大学出版会.
- 真鍋一史 (2002) 「ファセット：ファセット・デザイン、ファセット・アナリシス、ファセット・セオリー」『ファセット理論と解析事例』 ナカニシヤ出版.
- 真鍋一史 (2008) 「日本的な『宗教意識』の構造——『価値観と宗教意識』に関する全国調査の結果の分析——」『関西学院大学社会学部紀要』第104号.
- 真鍋一史 (2009) 「『宗教意識』の構造——日本とドイツにおける国際比較——」『関西学院大学社会学部紀要』第107号.
- 真鍋一史 (2010) 「欧米社会学における宗教理論と宗教調査」『関西学院大学先端社会研究所紀要』第4号.
- 真鍋一史 (2011) 「宗教性の諸相とその構造の国際比較——ISSP 2008 のデータ分析——」『関西学院大学社会学部紀要』第111号.
- 真鍋一史 (2012) 「宗教性の諸相とその構造の国際比較(Ⅱ)——ISSP 2008 のデータ分析——」『関西学院大学社会学部紀要』第115号.
- 真鍋一史 (2014) 「国際比較調査のデータ分析の課題と展望——『宗教意識調査』を事例として——」『関西学院大学社会学部紀要』第118号.
- 真鍋一史 (2017 a) 「日本における宗教性の諸相——『世界価値観調査』のデータ分析——」『青山スタンダード論集』第12号.
- 真鍋一史 (2017 b) 「日本における宗教性の諸相とその構造——『世界価値観調査』のデータ分析——」『関西学院大学社会学部紀要』第126号.
- 真鍋一史 (2018) 「『日本人の国民性調査』の二次分析の試み——宗教意識に関する質問諸項目をめぐる理論的考察と方法論的検討——」『青山スタンダード論集』第14号.
- 三宅一郎 (1998) 『政党支持の構造』 木鐸社.
- 三輪哲 (2007) 「変数の合成と主成分分析」『SPSSによる多変量解析』 オーム社.
- 中村圭志 (2018) 『人は「死後の世界」をどう考えてきたか』 角川書店.
- Norris, Pippa and Inglehart, Ronald (2004). *Sacred and Secular*. Cambridge University Press.
- 須田朗 (1989) 「不可知論」『コンサイス 20 世紀思想事典』 三省堂.
- 海野道郎 (1981) 「ある数理モデルの誕生」『関西学院大学社会学部紀要』第43号.
- 渡邊大輔 (2012) 「因子分析」『社会調査の応用』 弘文堂.
- 安田三郎 (1960) 『社会調査ハンドブック』 有斐閣.
- 安田三郎、原純輔 (1982) 『社会調査ハンドブック』 [第3版] 有斐閣.

付録 データ分析に使用した質問諸項目と単純集計結果

(1) ソシオ・デモグラフィック諸項目

地点 No. (居住地域)：リコード後

	度数	%	有効%
有効 6大都市	186	11.7%	11.7%
20万以上の市	566	35.6%	35.6%
20万未満の市	667	41.9%	41.9%
町村	172	10.8%	10.8%
合計	1591	100.0%	100.0%

F1 性別：リコード後

	度数	%	有効%
有効 男	737	46.3%	46.3%
女	854	53.7%	53.7%
合計	1591	100.0%	100.0%

F2 年齢：リコード後

	度数	%	有効%
有効 20～29歳	147	9.2%	9.3%
30～39歳	261	16.4%	16.4%
40～49歳	250	15.7%	15.7%
50～59歳	299	18.8%	18.8%
60～69歳	316	19.9%	19.9%
70歳以上	315	19.8%	19.8%
合計	1588	99.8%	100.0%
欠損値 19歳	3	0.2%	
合計	1591	100.0%	

問42 学歴：リコード後

	度数	%	有効%
有効 短大・高専・大学・大学院	598	37.6%	38.2%
高校	719	45.2%	45.9%
小学・中学	249	15.7%	15.9%
合計	1566	98.4%	100.0%
欠損値 その他	6	0.4%	
在学中	19	1.2%	
合計	25	1.6%	
合計	1591	100.0%	

(2) 人びとの個人的・社会的な意識と価値観の諸項目

問14 幸福か：リコード後

	度数	%	有効%
有効 不幸(1点)	53	3.3%	3.4%
幸福(2点)	1494	93.9%	96.6%
合計	1547	97.2%	100.0%
欠損値 その他	13	0.8%	
D.K.	31	1.9%	
合計	44	2.8%	
合計	1591	100.0%	

問18 人は信頼できるか：リコード後

	度数	%	有効%
有効 用心した方がよい(1点)	934	58.7%	62.2%
信頼できる(2点)	567	35.6%	37.8%
合計	1501	94.3%	100.0%
欠損値 その他	31	1.9%	
D.K.	59	3.7%	
合計	90	5.7%	
合計	1591	100.0%	

問28 自分のしあわせか、世の中のためか：リコード後

	度数	%	有効%
有効 自分のしあわせ(1点)	589	37.0%	37.8%
世の中のため(2点)	969	60.9%	62.2%
合計	1558	97.9%	100.0%
欠損値 その他	6	0.4%	
D.K.	27	1.7%	
合計	33	2.1%	
合計	1591	100.0%	

問38 環境保護は重要か：リコード後

	度数	%	有効%
有効 重要ではない(1点)	7	0.4%	0.4%
あまり重要ではない(2点)	91	5.7%	5.8%
重要である(3点)	855	53.7%	54.2%
非常に重要である(4点)	624	39.2%	39.6%
合計	1577	99.1%	100.0%
欠損値 その他	2	0.1%	
D.K.	12	0.8%	
合計	14	0.9%	
合計	1591	100.0%	

Secondary Analysis of the Japanese National Character Survey: Focusing on Question Items of Religious Consciousness

ABSTRACT

The purpose of this paper is to inquire into the various aspects, structure and character of Japanese religious consciousness by conducting a secondary analysis of the Japanese National Character Survey (the 13th nationwide survey) data.

The survey has been carried out every five years since 1953 by the Institute of Statistical Mathematics (ISM). More detailed information is available on ISM's home page of the Japanese National Character Survey.

Secondary analysis is a type of research in which data collected by others are re-analyzed based on the analyzer's own theories, hypotheses and methods. In this paper, I attempt to conduct "descriptive analysis", "structural analysis" and "causal analysis" focusing on four question items of Japanese religiosity asked in the Japanese National Character Survey.

1. As the method for the "descriptive analysis", I propose an idea of geometrical portrayal of the positive rates to the question items of Japanese religiosity using the "frequency distribution tables". That is, concretely speaking, a method of piling up each question item in accordance with the size of % of the positive response, and finally drawing a pyramid shape.

2. The methods used for the "structural analysis" are: (1) correlation matrix, (2) scale analysis, (3) factor analysis and (4) Cronbach's Alpha.

3. The specific procedures involved in the "causal analysis" are: (1) drawing line graphs showing the relationships between the socio-demographic items and the religiosity items, and (2) drawing line graphs showing the relationships between the religiosity items and the personal-social consciousness and values items.

The results of these data analyses show that four question items asked in the Japanese National Character Survey have lower internal reliabilities and lower external validities than expected.

Key Words: Japanese National Character Survey, secondary analysis, the various aspects, structure and character of religious consciousness, frequency distribution, reliability, validity